札幌大学総合論叢　第23号（2007年3月）

〈論文〉

フランスにおける環境文学の試み
――コランソン・アン・ヴェルコール環境文学フェスティヴァルの場合――

田　中　恒　寿

はじめに

フランスにおいて環境文学はまだまだ地味なジャンルである。作家・作品の観点から見てもそうだが，批評・研究の観点から見ても，例えばアメリカのASLE（The Association for the Study of Literature and Environment），日本の文学・環境学会に相当するような組織の存在を，寡聞にして筆者は知らない。

もちろん歴史的に見て，環境文学のジャンルに分類し得る作品が，フランスにおいてもあまた存在していることは確かである。しかしながら，とりわけ近年における急速な自然環境の悪化を憂い，オルターナティヴを示唆するような書き手，しかも力のある書き手が現れないというのはむしろ意外というべきであろう。そのことがかえってフランス文学の特質を浮き彫りにしていると言えなくもないのだが。

そんな中，2006年の夏（7月8日）に環境文学フェスティヴァルなるものがグルノーブルの南西，ヴェルコール自然公園のお膝元ではじめて開催されたことは注目に値する。以下，このイヴェントについての報告を通じて，フランスにおける草の根レベルでの環境文学の実践状況を検証したい。

第1章　開催に至る経緯

ヴェルコール自然公園はフランスで最大の規模を誇る[1)]。北端でグルノーブルに迫り，南端でディーに接するこの石灰岩の台地は16,662ヘクタール（岩手県とほぼ同じぐらい）

の面積を擁している。ドラ，イゼール，ドロームといった川に囲まれ，最高峰グラン・ベーモン山は標高2,341メートルだが，概して1,100から1,500メートルの山並みが重々と連なっている。カルスト地形が発達し，地下には鍾乳洞のネットワークが広がっているらしい（リストアップされているものだけで3,000もの洞窟を数える）。長らく他の地域から孤立し，人間による開拓からも逃れていたこの高地を，国立公園にしようとする動きは1939年にまで遡るが，第二次大戦でうやむやになる。しばし等閑視されていたヴェルコールの自然の魅力を1960年に再発見したのは，イギリス人技師のジェラルド・テイラーだった。この手付かずの高原の魅力を観光開発から守りたいというテイラーの情熱が実を結び，1967年にヴェルコール自然公園が発足する。1985年には国が正式な保護に乗り出した。シカ，カモシカ，ブクタン（野生のヤギ），イノシシ，ムフロン（野生の羊）といった大型の哺乳動物のほかに，オオワシ，ハゲタカ，ライチョウなどの鳥類，ヴィーナスの木靴（アツモリソウの仲間），野生のチューリップといった珍しい高山植物にいたるまで，豊かな生物多様性を誇っているヴェルコールだが，その証左として近年，再びオオカミが戻ってきたことは特筆に価する。（中央ピレネーに続いてクマの再導入も議論の俎上に上ってきているようだ。筆者が投宿した宿屋の主人夫婦は，日本に二種類もクマがいると聞いてじつに羨ましそうだった。）

このヴェルコール自然公園へ北側からアプローチするには，まずグルノーブルが拠点となる。そして，北の玄関口にあたるのがコランソン・アン・ヴェルコールだ。人口300人ほどの小さな村だが，冬はスキー客で溢れかえるという。グルノーブルからバスに乗り，九十九折の道を小一時間ほども揺られると，役場前の停留所に着く。ヴェルコール自然公園の入り口だ。標高はすでに1,100メートルを超えていて，グルノーブルあたりの人たちはここを「世の果て」と呼ぶ。この先，自然公園内にガソリン車を乗り入れることはできない。どうしても車に頼りたければ電気自動車を利用する他ない。ここが「世の果て」なら，ここから奥は「あの世」だろうか，「別世界」だろうか。自然公園に向かって左手にはドゥー・ムシュロルという双耳峰が聳え，北ヴェルコール山塊の頂が連なる。そのドゥー・ムシュロルの名前を冠した旅館が村役場の向かいにあった。ここが事実上，今回の環境文学フェスティヴァルの本部である。フェスティヴァルの前日からすでに大勢の人が準備に追われていた。旅館のお上さんは実行委員の一人。準備の合間を縫って実行委員長のアンヌ＝マリー・ジャネ女史が筆者のために電気自動車を駆って村をひとまわり案内してくれた。

そもそもこの旅館オーベルジュ・ドゥ・ドゥー・ムシュロルの食堂はしばしば文学サロンに早代わりし，朗読会なども催される。もともとアマチュア作家を対象として懸賞作品

を募るイヴェントを過去数回にわたって開催した実績も持っている。それが今回『テール・ソヴァージュ』誌と手を組んで，第1回環境文学フェルティヴァルが実現される運びとなった。『テール・ソヴァージュ』誌は環境保護をテーマにした月刊誌で，フランスではこの分野において長年独占的な地位を保ちつづけてきた。しかし，近年の環境問題に対する意識の高まりにともない，ニコラ・ユロを中心とする『ユシュアイア』誌など競合する有力他誌も登場してきたために，うかうかできない状況にある。ちなみに『テール・ソヴァージュ』誌は2005年の9月号でヴェルコールの特集を組んでいる。

第2章　イヴェントの詳細

フェスティヴァルは二部構成で行われ，午前の部と午後の部の間に役場前の広場で受賞者に対する授賞式が催された。

まずは午前の部。村の中の要所要所で多彩な出し物が繰り広げられる。参加者は三々五々，「plume de narture」と記された矢印を頼りにオリエンテーリングよろしく歩いて観て回るという仕組みだ。出し物は朗読，一人語り，演劇（二組）といった文学的なものばかりとはかぎらない。バーバリー・オルガンの演奏と伝統的なシャンソン，村に残る文化遺産の紹介，ロックバンド，ケベック音楽，果ては水彩画のスケッチまである[2)]。ヴェルコール山塊を借景に麦畑の真ん中でサン＝テグジュペリの『人間の大地』をそらんじた初老の男性がいたが，このような形で文学作品を享受するし方があったのかと衝撃を受けた。10時にスタートし，ひととおり観て回ったら，ちょうどお昼時になる。

正午から役場前で授賞式。実行委員長であるアンヌ＝マリー，共催者である『テール・ソヴァージュ』誌の編集長，コランソン村の村長といった面々が相次いでスピーチに立ったあと，受賞作品が発表され，親密な雰囲気の中で授賞式が執り行われた。セレモニーが終ると，観光案内所の前に設営されたテントで用意された軽い昼食とワインを楽しむ人，近隣のカフェやレストランへ流れて行く人とさまざまだ。

昼ご飯を楽しんだ後は，ゴルフ場周辺の森にフィールドを移して再びプロムナードとアトラクションが繰り返された。出演者はほぼ同じ。出し物まで同じグループもあった。道端の多彩な花が彩りを添える。最後は森の広場で書籍の販売と受賞作の朗読が行われた。朗読をしたのはくだんの麦畑の老紳士。バーバリー・オルガンの伴奏とそれに唱和する聴衆のコーラス付きだ。この朗読会の雰囲気にも圧倒される。筆者は半ば陶酔したような幸せな気分に浸ったまま，フェスティヴァルはお開きとなった。

第3章　受賞作品について

2006年度のコランソン環境文学賞は，統一テーマとして「水の話」を掲げた。ありふれたテーマだけにどのように料理するか，書き手の力量が問われるところだろう。

60を超える応募作品の中から栄えある大賞を受賞したのはジスレーヌ・グランシェ氏の『おチビちゃん』だ[3)]。

語り手である「わたし」ことシルヴィーの出生の秘密をめぐる物語がモノローグ風に，しかも飄々とした調子で語られている。舞台は地理的に特定されていない。兄が兵役に志願しているとあるから，「わたし」の幼年時代は第二次大戦後あたりだろうか。

冒頭，通称“おチビちゃん”のニックネームの由来が長々と説明される。つまり「わたし」は末っ子で，エリック，ダニエル，クロード，アリーヌ，ブランディーヌといった「大きい」兄や姉に比べるとじつに幼い。まるでアリーヌの子供のようだ。父母を呼ぶときも「わたし」だけは「パパ」「ママン」ではなく「パプーネ」「マムーネット」とくる。

「わたし」は森の水辺で一人静かに過ごすのが好きだった。溺れるから川に近づいてはいけないと両親にきびしく止められてはいたけれど。奥には池があった。週末には釣り人の影もあったが平日は人気がない。「わたし」は木曜日にこの場所をひそかに訪れるのを常としていた。ハクチョウ，カモ，バンといった水鳥，ヌートリアのような哺乳類，あるいは水面に跳ねる魚を観察して時のたつのも忘れる。流れに足を浸したときの冷たさ。「わたし」はこの桃源郷のような自然空間の騒がしい静寂を好む。野鳥の羽音，ヒキガエルの鳴き声，風の音，木々の枝鳴り，昆虫のがさごそいう音。森には町とは違う音が満ちている。「わたし」にとってここは第二の我が家だ。

ある日「わたし」は「私生の姪」という言葉の意味を年長の兄弟たちに尋ねまわって家族の顰蹙を買った。何のことだかよくわからないが，釈然としないまま物語は進んでいく。

学年も進み，小学校の担任の先生は，「わたし」に中学進学を勧める。はじめ両親は猛反対するが，兄弟たちの説得の末，めでたく進学が許された。ところがある日，入学に必要な書類を目にした「わたし」は思わず駆け出しそうになるほど困惑した。「姓：ジェルマン」これは知ってのとおり。「名：オンディーヌ」何かの間違いでは。「父：不詳。母：ブランディーヌ・ジェルマン」なんと，「わたし」が生まれた年になくなったブランディーヌが母親だなんて。

翌日，真相を確かめるべくダニエルにそれとなく鎌をかけてみたが，肝心のところになると冷たくあしらわれ取り付く島もない。しかたなく両親の留守を狙ってタンスをかき回

すと，ブランディーヌの書いた手紙が見つかった。むさぼるように読む。「赤ちゃんを置いていきます。できたらオンディーヌと呼んでくれれば嬉しいんだけれど。水辺で生まれた子供なの。でも私はもうこの子の母親でいられません。お父さんお母さん，ごめんなさい。」

のちにクロードが語ってくれたことによると，赤ん坊の「わたし」は産着に丁寧にくるまれて猟師小屋へ置かれていたという。ブランディーヌは例の池に身を投げた。最後まで父親の名は明かさなかったらしい。

テーマは深刻だがさらっとした文体で読後感は爽やかだ。物語の中盤，問題の水辺での「わたし」と自然との気負いのない交感がこの作品に彩りとゆとりを与えていると言えるだろう。

次に紹介するのは，惜しくも特別賞となったアンヌ・ルシュヴァリエ氏の『流れる出会い』だ。舞台はアフリカ。単純過去を用いたオーソドックスな物語世界にエキゾチスムが彩りを添える。

三年越しの旱魃にあえぐバオ村の話。一日の過酷な農作業を終えて家路に向かう途中，主人公のムッサが丘の上でしばし荘厳な日の入りの光景に見とれている。最愛の妻ガイアに先立たれてからというもの，ムッサの苦労はあとを絶たない。今では家の近くの畑をあきらめ，水利はいいがはるかに遠い畑まで通うことを余儀なくされていた。

ふと，足元の草むらから何か物音が聞こえてくるのにムッサは気がついた。さらさらと流れる水の音のようにも聞こえる。よく見ると，薄曇りの空のような色の衣をまとった女がうずくまって泣いている。伝統的な装束，黒檀のようにつややかな肌，整った面立ち。女の美しさは際立っていた。

荒涼としたあたりの風景とは不釣合いなほど端麗な女のいでたちと涙に戸惑いながらも，ムッサは手を差し伸べ，女を自分の家へと連れ帰ることにする。女は名をルヴィアといった。

家では母親が質素ながらも厚くもてなした。子供たちもおおはしゃぎだ。ルヴィアはすぐに打ち解け，ほどなくムッサは彼女に結婚を申し込む。新月にあわせて二人の結婚式が執り行われることになった。村の真ん中にある樹齢百年のバオバブの大木が聳える広場に村中が集い，婚礼の宴が夜通し繰り広げられた。

翌日からまたいつもの暮らしが，だがルヴィアがいることで喜びに満ちた暮らしが始まる。ムッサは，朝になるたび家の前に大瓢箪二つ分の水が汲まれていることに気がついた。ルヴィアがやったに違いない。しかし水汲みは重労働だ。そこまで頑張る必要はないとム

ッサは諭したが，ルヴィアは聞こうとしない。

そのうち，ムッサの家の周りに青々とした草が茂るようになった。ヤギや牛も集まってくる。広場のバオバブもつややかな葉で覆われ，日中ともなれば涼やかな木陰を村人たちに提供した。村人たちは驚きそして喜んだが，それもつかの間，しだいに不安が広がっていく。空には雲ひとつなく，雨は一滴も降っていないというのに，この水はどこから来るのだろうかと。村の偉大な祈祷師はこの不思議な現象を解明するために，ありとあらゆるお祈りをはじめた。

当惑したのはムッサも同じだ。が，今ではもう遠くの畑まで行かずとも，裏の畑を耕せば足りる。家族のそばを離れずに済んだ。もう水汲みはいいから休めとムッサは妻にむかって言ったが，ルヴィアはあいかわらず夜明け前になると床を抜け出すことを止めない。

まもなく恵みの水が大問題の種となる。村のあちこちに沼地が広がり，マングローブが生い茂るようになったのだ。杭の上に家を建てなくてはならない事態に至って，村人の不安は絶頂を極める。

ある夜，いつものように妻が出かけたあと，ムッサはかすかな物音に目を覚ました。空が白み始めたのを見計らってそっと家の外に出てみると，水浸しになった庭の草陰に巨大な細長いものが滑り込んでいくのを目撃する。恐ろしくなったムッサは家に駆け込んだ。やがてルヴィアが戻ってくる。ムッサは彼女を守るように抱きしめた。

明け方になって外に出てみると，痕跡は明かだ。大蛇に間違いない。村の猛者が集まって，大蛇をとらえるためのわなを仕掛けることになった。道が川となり，水浸しになった村では，もう一刻も猶予はない。夕暮れ時から村の周囲に男たちが見張りに立った。

見張り番にあたらなかったムッサは，若い妻と枕を並べて眠っていたが，ルヴィアが起き出したのに気がついて息が止まりそうになった。大蛇がうろついているかも知れないというのに，まだ水を汲もうというのか。妻の身に何かあってはと後を追うと，ムッサは思いもかけない光景を目にする。まるで踊っているかのように妻の体がくねくねと躍動したかと思うと，尻尾から頭へと見る見る大蛇に変身していったのだ。ムッサは何とか恐怖を押さえて蛇に近づいた。蛇もムッサのほうへ鎌首をもたげる。その目はまぎれもなくルヴィアのものだった。

恐ろしい蛇に姿を変えたルヴィアが語ったところによると，蛇の神サオがタンザニアの山中に隠れ家を建てルヴィアに求婚したが，ルヴィアの父が拒んだため，ルヴィアに魔法がかけられてしまった。サオと結婚しない限り魔法が解けることはない。雨の神であるルヴィアの父も，娘が夜な夜な蛇に変身するのを防ぐ術はない。しかし，涙の力を借りて毒素を少しずつ洗い流すのを手伝うことはできる。かくしてキリマンジャロの頂に雲を集め，

この地方の雨をすべてルヴィアの涙に変えていたのだった。

これだけ言うと，涙の間に微笑を浮かべて，ルヴィアは去っていった。

もう一本の特別賞はディディエ・ドゥレーグ氏の『雨の日』に与えられた。こちらは一転して，ドラマティックな要素よりも雰囲気作りに心を砕いたショート・ショートである。ある一人の酔っ払いに焦点を絞って，あたかもホームビデオで撮影したかのような印象を，現在形による淡々とした描写がかもし出している。

舞台はとあるビストロ。外では車軸を流したような雨が騒がしく降り続いている。常連のギュスターヴじいさんが水を一杯注文してバーテンを驚かせた。この酒好きが何故に水なんかと訝る周囲にもかまわず，コップの水を一息にのみ干すとギュスターヴは店を後にした。「嫌な天気だ」とつぶやきながら。

ギュスターヴは二十年前の出来事を思い出す。雨の中，大型バイクに乗って工場へ仕事に向かった息子が行方不明となった。二日後，バイクもろとも溝にはまってぶよぶよになった息子の遺体が発見される。以来，ギュスターヴの人生は空っぽとなったのだ。

土砂降りの雨の中，ギュスターヴは学校の前を通りがかった。子供たちは嵐の中，われ先にと家路を急ぐ。その中で一人だけ，降りしきる雨をものともせずに立ちすくんでいる少女がいた。唇には微笑みさえ浮かべて童謡を口ずさんでいる。そのうち女の子は踊り始めた。高らかに笑いながら，踊りに酔いしれ，雨に酔いしれている。

その光景にギュスターヴは心を打たれた。目には涙があふれてくる。目を閉じたまま天を仰ぎ，再び目を開くと虹が現れていた。過去にとらわれていてもし方がない。それでも人生は流れていくのだと悟ったギュスターヴは，再びゆっくりと家路に向かう。

悲しい出来事と結びついた嵐の記憶がいったんは老人の気を滅入らせるが，無垢な少女の振る舞いによって救いの雨と転じていく，その切り替えが鮮やかに描き出されている作品である。

ジュニア部門で大賞を受賞したのはロバン・アンセルミ氏の『穴あき瓢箪の男』だ。武勲詩風の書きっぷりで短いながらも勇壮な作品に仕上がっている。

時は十五世紀末。ジュリオという一人の男の子が生まれた。ジュリオは誕生に際して母を失い，父も数年後，王のために金塊を護送していた最中に山賊の襲撃にあって死ぬ。その際ジュリオの父は，からくも修羅場から逃げ出して先祖伝来の剣を，いくばくかの金貨と一緒に埋め隠すことができた。今にも息を引き取ろうとしたその時，現れ出でた一人の妖精に彼は願いを託す。「息子が成長した暁には，ここへ導いてやってくれ」と。ジュリ

オの父が事切れると，宝を隠した場所から白い光線がほとばしり出ると同時に，川の水が枯れ，不思議な生き物がはびこった。

十四年後，ジュリオは屈強な若者へと成長を遂げていた。王は九年前からジュリオを養子として育てている。水を村中に分配するのが王の朝の日課だったが，蓄えもすぐに底をついた。

三日前から，ジュリオは夜中に窓の外をちらつく何者かの姿に気がついていた。一計を案じ，ハリエニシダを編んだ籠でその生き物を捕らえてみると，驚いたことに妖精ではないか。

妖精はジュリオによどみなく父親のことを語って聞かせた。そして宝の隠し場所まで案内すると言う。ジュリオは親友である兵士マーキュスとその部下たちを伴い，秘密のトンネルを使って城を抜け出すことにした。やがて一行は人気のない中庭にたどり着く。重い木製の板をずらすと，真黒な穴が地中に口を開いていた。妖精が道案内に立ち，二時間歩いたところで一休みする。妖精がなにやら呪文を唱えると地図が現れ，現在位置と目的地を指し示した。

ジュリオは腹ごしらえもそこそこに立ち上がると先を急ぎたがったが，妖精の動きが次第にぎこちなくなってくる。「何者かの力が働いていて私の魔力が使えない」と搾り出すように言ったかと思うと，妖精は昏睡状態に陥ってしまった。一行はあわてて身構えたが，一陣の風が吹いて妖精は意識を取り戻す。武器を捨てろという妖精の命令に従って，皆がしぶしぶ武器を手放すと，風はぴたりと静まった。どこからともなく声が響き渡る。「とてつもなく大きな力が川から吸い上げられている。それを止めようとすれば誰であろうと焼け死んでしまうだろう。」だが，初めから不退転の決意で臨んでいたジュリオは，その声をものともしなかった。一行は目標に向かって再び歩き始める。妖精が写し取った地図によると，あと２，３キロで到達できるはずだ。一人の兵士が喉を潤そうと川の流れに近づいたとたん，巨大な藻が現れてその兵士に巻きつき，水の中に引きずり込んでしまった。あっという間の出来事だったが，悲しみに浸る間もなくジュリオは先を急ぐ。「これより先，どんな危険が待ち構えているかも知れぬ。俺に付いてくるかどうかは皆の自由だ。俺はなんとしても父親の宝を取り戻し，この川に取り付いている物の怪を退治してやる。」ジュリオの言葉にひるむものはいなかった。

一行はあらためて川と相対峙した。重苦しい雰囲気が漂う。翼の生えた蛇のような生きものが水面を飛び交い，行く手を阻もうとしている。一行は水中から発する金色の光を発見した。しかし，かつてよりはだいぶ川幅が広がっていると見えて，そこまでたどり着くためには川を半分以上も渡らなくてはならない。マーキュスが果敢に試みたが，半ばまで

進んだところで不思議な力に跳ね返され，いやというほど川岸の地面に体を投げつけられた。その有り様を見て笑った兵士が次に挑戦したが，また同じことの繰り返しだ。ジュリオは自分が行くべきなのだと悟る。十年来使われることのなかった水道管をきれいにしておくよう王に伝令を送ると，ジュリオは武器を捨て，妖精を露払いに，即席の筏に乗って渦の中へと漕ぎ進んだ。今度は川岸に投げ返されることはない。ジュリオは剣の柄と金庫の取っ手をつかむと，歓喜の涙に濡れたのもつかの間，長らくせき止められていた川の水が一気にほとばしり出た。危うく妖精と筏に乗り込む。川の流れは滔々と町に向い，水門という水門は開かれた。城に帰還したジュリオは歓喜の声で迎えられ，王はたいそう喜んだ。マーキュスは近衛兵の隊長に任ぜられ，ジュリオは後年フランスの王になったという。

受賞した四作品を読み比べてみると，やはり大賞を受賞した『おチビちゃん』は環境文学の名にふさわしい充実した内容を持っていると言えよう。「命の水」をテーマにした点で『流れる出会い』と『穴あき瓢箪の男』は共通していたが前者は神話的に，後者は武勲詩的に味付けがほどこされていたために多様性が保たれた。『雨の日』は都会的，場末的な雰囲気に満ちた小品だが，雨にまつわる悲しい記憶というだけでなく，ストーリーのきっかけが大酒飲みの注文する一杯の水から始まっているところが心憎い。

おわりに

コランソンにおける環境文学の試みはまだ緒に就いたばかりである。環境文学といえば通常エコロジーや自然保護に心を砕いて書かれた文学作品だと思われがちだが，コランソンのフェスティヴァルはそのような定義にはさほど拘泥していない。それどころか豊かな自然環境を存分に活用した多様な文学的実践と言ったほうがより正確にこの催しの性格を言い当てているだろう。環境文学をテクストの中だけに閉じ込めようとしないヴァイタリティーと精神の自由さをまざまざと見せ付けられたイヴェントだった。

来年の懸賞作品のテーマは「地面の下の奇妙な生きもの（生活）」と決まっている。今後の展開に期待したい。さらにはこのような「裾野」における環境文学の広がりと活性化が，「頂上」における作家・作品の充実と開花につながることが望まれる。

注

[1] 以下，ヴェルコール自然公園の概略についての素描は，『テール・ソヴァージュ』誌 2005 年 9 月号の

特集記事“Vercors, une île sauvage au bord des Alpes”を主に参照した。

[2] ちなみにバーバリー・オルガンの奏者はジャック・ゼール氏。一人芝居を演じたのはサミュエル・ヴィリアン氏。ケベック音楽を演奏したグループは“アンジュ・エ・レギュア”。水彩画はマリー＝ノエル・ボッサノ氏。芝居を演じたのは劇団“ラ・シテ”のメンバー。朗読はクリスチアン・ジャンマール氏。ヴァイオリンの入ったロックグループは“フィドル・ドゥ・デー”。歴史的建造物の説明はアンドル・エムリ氏といった面々である。

[3] 受賞した四作品の全文は，小冊子に印刷され参加者全員に配られた。

参考文献リスト

Terre sauvage, No. 209, septembre 2005.

Prix de la nouvelle de nature, *Corrençon-en-Vercors*, Recueil édition 2006.（非売品）